

～今月の花木～



ロウバイ 蠟梅

ロウバイ科・落葉低木・中国原産

日本には江戸時代に渡来し、観賞用によく植えられる。香りのよい黄色の花を下または横向きにつける。



日本での「松竹梅」のルーツとされる、中国の「三友図」のひとつ
(趙孟堅「歳寒三友図」13世紀)

歳寒三友—— 松竹梅のはなし

新年を寿ぐものとして、年賀状のイラストや盆栽のような寄せ植えなど「松竹梅」は、目出度いものの象徴として、日本では愛されています。

その源は、「歳寒三友(さいかんのさんゆう)」という、中国の文人画で好まれた、松と竹と梅を三つ一緒に配すような画題とされています。寒中にも緑の色褪せない松と竹、寒中に花をさかせる梅は、寒い冬の三つの友とされ、艱難辛苦(寒く厳しい冬)を耐え抜く象徴として、好まれてきました。また、「梅」「水仙」「竹」を配したのも「歳寒三友」と呼ばれています。このように「松竹梅」の元とされる「歳寒三友」ですが、中国での本来の意味合いでは日本のような目出度さの象徴とは異なっていました。

日本に伝わったのは平安時代とされ、それぞれの植物のもつ特徴とこれらが合わさったイメージから目出度さ、縁起の良さが彷彿され、日本独自の「松竹梅」の捉え方がされてきました。

松：常緑で不良長寿を連想させる
竹：青々とまっすぐに伸び、成長が早い
梅：寒気にめげず、百花に先駆けて咲く
また「松竹梅」は、等級の呼称として用いられ、一般には松が上位で竹、梅の順に下がってゆきますが、元々松竹梅には優劣があるわけではなく、等級を植物名に置き換えたほうが美しいため、用いられたようです。

新春・松竹梅対談

日頃、寄せ植えでもしない限り顔を合わせる機会の少ない、お三方にお集まりいただき、対談してもらいました。司会は、本紙、弊社編集担当Mです。

パネリストの皆様



松
マツ



竹
タケ



梅
ウメ

(竹) — おい、司会者。対談にかこつけて宣伝する気だな。

(司会) — 失礼しました。曲った事がお嫌いな、竹を割ったような性格ですな。さて、竹さんの今年の抱負は。

(竹) — 最近あまり使ってくれる人が少ないから、今年も生育旺盛に野を越え柵を越えいろんなところに侵入するぞ。

(松) — 元気で、いいですな。

(竹) — それほどで(司会) — 竹さん、謙遜している場合ではないですよ。人間にとって入り込まないでほしい住宅の敷地などにも、最近侵入してきて困ることがあります。その原因は、人が竹の利用や竹やぶの手入れをしなくなったことが、悪いのですが。

(梅) — あーあ。いつも私は後回し。順番でいえば一番最後、もし

くは、下等。おまけにパネリスト紹介でも、一番下だし。

(竹) — そう、ひがみなさん。私は松竹梅では、上でも下でもなく、いつつも真ん中で、「竹は木か草か？」などといわれ、どっちつかずのような立場ですぞ。

(松) — 松竹梅の上とか下とかの話は人間が勝手に決めたもので、語呂の良さから、おそらくこの順番なのでしょう。松さんがいうように、あなたは一番下ではなく、むしろこの中の誰よりも先駆けて一番美しい花を咲かせ、その実は人間の食物にもなり、現在の日本では少なくともお三方の中では一番利用されていますよ。遅ればせながら、梅さんの今年の抱

負を聞かせて下さい。(梅) — 抱負というより、ここ数年、特に東京都青梅市周辺でプラムポックスウイルスという、今のところ有効な治療法のない病気が発生してしまい、感染した仲間が大量に処分されてしまっていることが早く収束してほしい。(司会) — 切実な願いですね。補足ですが、ウイルスに感染した梅の実を人間が食べると、害はありません。念のため。

(松) — 松枯れ、竹林被害、ウイルスと三者三様に問題を抱えていますな。

(梅) — 全然おめでたく無いですね。(竹) — おーい、何とかしてくれ。

(司会) 問題の解決には物言わぬ皆様のため、私たち人間がもつと関わってゆきましょう。本日は御清聴いただき、ありがとうございました。

松竹梅を 物見遊山する

竹に親しむ

東名沼津インターに程近いところにある、「富士竹類植物園」は、知る人ぞ知る、日本唯一の竹の植物園です。その名のとおり、竹づくしの植物園で、国内はもとより世界各地の竹や笹が観察できます。

園内には、竹に関する様々な内容を取り上げた資料館があり、竹に関する疑問や身近に役立つ知識も習得できます。竹や笹に興味のあるかた、お子様の自由研究の題材にお困りの方には、ぜひ訪れてみたい植物園です。

住所: 静岡県駿東郡長泉町南一色 885

※場所が分かりにくいのと、休園日等、事前にホームページ等で調べてからの訪問がおすすめです



写真の「キッコウチク」など、珍しい竹も数多く観察できる。「タケ」と「ササ」と「バンブー」の違いを、知ることができた。

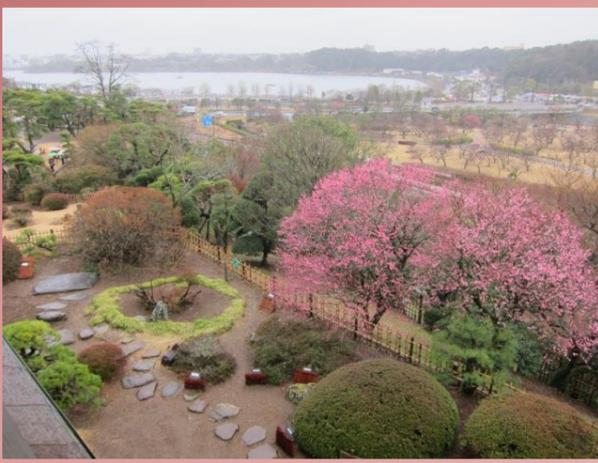


資料館の展示は、非常にわかりやすく、かつためになるものが多いので、さほど興味がなくとも、のぞいてみたいものである。

※梅は開花時期が気温による影響が大きいため、最新の開花情報などを参考に訪問されることを、おすすめします。



「好文亭」亭内からの眺め。梅が咲いていると絵になる。見学順路にしたがい、各部屋を回ることができる。寒い日は特に足元を暖かくして入りたいものである。



「好文亭」三階、「楽寿楼」から眼下に広がる千波湖を望む。現地で見ると、いい景色だな…と、単純に思ってしまう眺めである。



昨年3月10日に訪れたときは、気温が低い日が続いていたため、早咲きの梅しか咲いておらず、全体的には二分咲きぐらいの状況であった。

松を眺める

北陸地方に旅行や用事のあるかたは、石川県金沢市にある、「兼六園」をぜひ訪れてみては、いかがでしょうか。冬の季節は、春の桜や秋の紅葉といった華やかさには乏しい季節ですが、雪吊りの施された松や冬でも青々とした苔、全体的に手入れや清掃の行き届いた庭園には、清々しさすら感じます。



雪吊りは、松の雪による枝折れを防止する役目と冬の風物詩としての観賞目的もある。



威風堂々とした佇まいの、「根上松」。高い盛土に松を植えて、徐々に土を除いて根をあらわしたものと、伝えられる。



ライトアップは、期日限定のため、兼六園ホームページなどで、事前に情報収集してから、訪れたい。



雪が積もっていないところでは、苔の上に落ちた「落椿」をみることができるとも、しれない。(松とは関係ありませんが…)

梅を愛でる

梅の名所といえば、水戸の「偕楽園」を思い浮かべる方も多いのでは、ないでしょうか。水戸藩第九代藩主徳川斉昭（なりあき）によって造園され、領内の民と偕（とも）に楽しむ場にしたと願い「偕楽園」はつくられました。現在では、観梅のシーズンになると、本当に多くの観光客が楽しみに訪れます。

梅以外にも見所はあるのですが、あまりにも梅ばかりが有名な庭園です。園内の「好文亭」は、ぜひ訪れたい見所のひとつです。